

- 折り鶴との歩み -

幼少期の頃に熱中した折り紙。その中でも特に有名な伝承折り紙の一つである「折り鶴」。

共に時間を過ごして行くに連れて「折り鶴」には、彷徨っている気持ちの吐き場所であり、繰り返される情性の様な違和感を感じることがあります。そこには自分と折り鶴とを繋ぐものや、自分の考える折り鶴の「居場所」や「終着点」というものは、ありませんでした。

2011年に東北で震災がありました。翌年の4月に岩手県陸前高田へと赴き、現地の方の話を聞き、実際に町を見て回りました。自然の脅威の前では人間は何もできないのだと恐ろしく、また、その中で輝く生命の力強さも受けました。いつの時代も、人種も性別も社会的地位も関係なく襲ってくる自然と向き合い、時にあやかり、共存しているのだと改めて感じます。そしてその体験は、そのときを共にしたすべての生命と共有するものが生まれたと共に、いまを生きている、ということをハッキリと意識させられました。

その様な中で、折り鶴の持つ「祈り」という側面に親和性を感じました。折り鶴には、行き場のない気持ちを託し、この世ではない場所を行き来するようにと、祈りを込めた孤独な儀式的様な感覚を感じることがあります。うまく言葉では表現できませんが、今、折り上げている折り鶴は、そういった「祈り」からきているものなのかもしれません。自然の脅威や恩恵、またその様な事柄に折り鶴を重ね、作品に落とし込むことで、折り鶴の「居場所」を創り上げています。

改めて見つめ直してみると、折り鶴はどこか尊く、また神秘的な「なにか」がひそんでいる様に感じます。そして、それはまた、私の信じている「美しさ」でありました。

ひとりひとりが自分なりの「折り鶴」や「祈り」のかたちを持っているかと思います。どの様に感じ、どの様に思いを重ねるかは人それぞれですが、作品との対話を通し、心を揺さぶる「なにか」が生まれるとことを願っています。